

“Cool heads but warm hearts.”

成城大学教授 村本 孜

凡そ経済学を学んだ者であれば、一度は耳にする言葉に、マーシャルの“Cool heads but warm hearts.”がある。この言葉は、ケインズが、『人物評伝』でマーシャルを論じた章で紹介したことにより、広く知られるようになった。マーシャルは1884年12月にケンブリッジ大学の政治経済学教授に選出され、翌年2月の教授就任講演の、その最後の締め括り部分で、周囲の社会的な苦難に取り組むために冷静な頭脳をもって、しかし暖かい心情をもって (cool heads but warm hearts) 進んで力を差し出す者をより多数、ケンブリッジが世に送り出すよう微力ながら全力を尽くすことが自分の志である旨を述べている。ケインズは、マーシャルの愛弟子で、やがて師と袂を分かつことになるのだが、『人物評伝』の中で彼のことを次のように評した。「説教者としてまた人間の牧師として、彼はほかの同様な人物よりも格別すぐれていたわけではない。しかし科学者としては、彼はその専門の分野において、100年間を通じて世界中でもっとも偉大な学者であった。」

当時のケンブリッジでは、経済学の学科がなくマーシャルはその創設に努力し、1903年に漸く実現する。この時まで、経済学は歴史と道徳科学の課程の下で教えられており、経済学に精力的で専門化された学生達がマーシャルの望むようには育ちにくい環境にあった。

“Cool heads but warm hearts.”は、先の教授就任講演でのものという説のほか、マーシャルが、ロンドンの貧民街にケンブリッジの学生たちを連れて行き、「経済学を学ぶには、理論的に物事を解明する冷静な頭脳を必要とする一方、階級社会の底辺に位置する人々の生活を何とかしたいという暖かい心が必要だ」と論じたという説もある。すなわち、学問を究めるにしても、仕事を極めるにしても、冷静な頭脳は欠かせない。しかしそれ以上に必要なものが、

人間性である。特に人々を牽引するような立場の人間には、より一層の常識、正義感、道徳、そして暖かい心が備わっていなければならない、ということ論じたというものである。

当時のイギリスは、後発資本主義国であったドイツやアメリカに追いつかれつつあったとはいえ、広大な植民地を抱えており、経済的な覇権を握り続けていた。しかし、繁栄の裏側には、スラム街に生活する貧しい労働者が数多くいた。貧困の解決はマーシャルにとって重要な研究課題であった。彼にとっての経済学は、“Cool heads but warm hearts.”を持って、繁栄するヴィクトリア朝の裏面から目をそらすことはなく、経済の担い手である企業者や資本家たちに社会的責任を果たすべく「経済騎士道」を要求したのである。

アベノミックスは異次元の金融緩和により期待（予想インフレ率の上昇）のチャンネルで景気の気の部分は改善した。しかし、第三の矢の成長戦略は見えにくい。労働市場の改革などの岩盤規制の改革に焦点が当たるが、改革の負の側面から目をそらすことなく経済弱者にも目配りした戦略が必要である。OECD加盟30カ国中4番目に高い相対的貧困率の問題をいかに解決するか、非正規雇用に典型的な雇用形態のあり方の問題、疲弊してきた地域経済の再生の問題、世代会計的に負担の不公平性が懸念される問題など、課題は多い。少なくとも雇用を費用項目として捉えるのではなく、経済学でいう生産関数には人材（労働）が重要な生産要素で投入量であるように、人的資本すなわち投資であると認識して、人材育成に注力できる体制整備こそ、イノベーションを実現する根幹であろう。